

円形式北斗曼荼羅の成立に関する一考察—ホロスコープとの関わりを中心に—

松永恵実（武蔵野美術大学）

北斗曼荼羅（星曼荼羅）は、除災・招福・延命を祈願する北斗法の本尊である。円形式北斗曼荼羅は、天台座主慶円の創案によると伝わるが、その初期図像は明らかにされていない。本発表では、慶円式の成立当初の形式を考察するうえで重要な三つの形式に、松浦清氏が先行研究でホロスコープ的性格を指摘した法隆寺本に連なり、より明確にそれを備えるメトロポリタン本および石山寺本を加えた四形式の相互関係を検討する。

第一に、現存作例が最も多い四重円構成を基本とする法隆寺本形式。第二に、同じく四重円構成だが十二宮・二十八宿の配置方向が法隆寺本と異なる仁和寺本形式。第三に、吉祥眞雄氏が昭和十一年に『六大新報』1691号で慶円式として図示した五重同心円からなる形式（以下「吉祥氏形式」）。第四に、ホロスコープ的性格が顕著なメトロポリタン本や石山寺本のホロスコープ形式である。これら両作は五重の同心円構造を持ち、構成要素（北斗七星・九曜〈十一曜〉・十二宮・二十八宿・三十六禽）や配置にはいくつかの特徴がある。特に、第三院における惑星の配置は不規則かつ偏っており、法隆寺本など他の北斗曼荼羅とは異なる。ジェフリー・コデック氏はメトロポリタン本について、惑星配置をもとにホロスコープ図を復元し、太陰太陽暦と数日の誤差を踏まえ1225年10月3日を指すとし、個人の誕生日時に基づく構成とみる。発表者も石山寺本を同様に検討し、1217年6月30日を示すことを確認する。

円構造や各院の構成、九曜・星宿の配置方向の相違、釈迦金輪が王権象徴の尊格である点を踏まえて四形式の関係を整理すると、このうち吉祥氏形式および仁和寺本形式が早期に成立した形式と見做される。すなわちこれらにおける方位は、ともに曼荼羅全般における基本である俯瞰構図になっている。とりわけ、五重円構造を備え、九曜と北斗七星を別院に配する吉祥氏形式は、寛空創案の方形式北斗曼荼羅を一部参照したと考えられる点で、四重円構成の仁和寺本形式に先立って成立した可能性が高い。

それに対して、法隆寺本形式では、十二宮・二十八宿が向かって時計回りに配置され、星を地上から仰ぐ構図である。この変化は、北斗法の対象が為政者層に限られず、より広い階層に開かれたことを示唆する。一方、ホロスコープ形式は方位を含め吉祥氏形式の図案を継承しつつ、現存するホロスコープ図である生年勘文の配置や占星術要素、『勸随通用小折紙』第六結天等部上に見られる図像の本命星信仰と結びつくことで成立したと考えられる。

以上の検討から、慶円創案の原型を最も伝える図像は、吉祥氏が『六大新報』に掲載した図であると結論される。